

牧野井田さん

山中九一郎さん（92歳、牧野阪・丸天酒店）

△その1▽

1990. 7. 1号

◇：山中九一郎さんは、酒・醬油の丸天商店の今日を築き今は引退の身。昨年九十一歳の時、身内の人に伝えるため、毛筆で『私一生の想ひ出』（百五十頁）をまとめられた。その中から特に身内の方に関係した部分を除き、文章、文字の表記に少しだけ手を加え、掲載するということをお願いして了承いただいた……………◇

招提に生まれる

私は明治三十一年の五月七日に招提で生まれました。実家は米穀と肥料の商いをしており、今も「丸天肥料」として続いています。その四人きょうだい（二男二女）の二男でした。数え八歳の四月に、招提尋常小学校に入學しました。四年制だった小学校は招提門口町にありましたが、招提九十分町に新校舎ができて尋常科は六年制になり、そこで尋常小学校を卒業しました。高等小学校は、山田村、菅原村、招提村、

津田村、氷室村の五ヶ村で建立した交北高等小学校といって、山田村田口の出屋敷にありました。遠い村からは一里（四キロ）も一里半も歩いて通学したものです。しかしこれではかわいそうやということになり、どの町村にも高等小学校を設立することになりました。招提村でも、招提尋常小学校に高等科が併設されて招提尋常高等小学校となり、私は交北校に一年通った後、また招提村へ戻って、高等科を無事卒業することができました。

大阪の商業学校に

父や兄は、身分不相応だがお前は上級学校へ行け、家は商売をしているから商業学校へ行けと言うのですが、商業学校は大阪のどこにあるのやら、何を教えるのやら、当時の先生も御存知なかったようでした。

新聞を気をつけて見ていると、大阪の上福島にある関西大が甲種商業学校を新設して生徒募集と書いてありました。さっそく兄に連れられて訪ねて行って願書を提出したところ、小学校時代の成績が良かったので無試験で入学を許可されました。

自宅の招提を出てから牧野駅まで三十分かかりましたが、道路は現在のように一直線ではなく曲りくねって、家は一軒もなくさびしい道でした。自転車も、三百戸程の村に二台あつ

ただけです。私の家にも一台ありましたが兄専用で、通学用には絶対使えません。時間はかかっても歩いて通学しました。

母の思い出

当時、京阪電車も大阪の市電並みの小さい電車で、駅のホームもなく道路から直接ステップに上がる仕組みでした。急行や準急もなく、牧野から一時間かかって天満橋に着きました。そこから市電にのって福島で下車し、学校まで歩きましたが、二時間はしっかりかかりました。私を学校にやるために、母は毎日朝四時に起きて弁当をこしらえてくれました。冬の陽



の短い時は、朝はまだ暗いので人は誰も通っていません。それで母は、毎日お宮（片埜神社）の森まで送ってくれました。その母は、私が学校を卒業して一人前になる先に他界しました。恩返しもできず、何としても残念なことです。私は、母の恩は片時も忘れません。

家業を手伝う

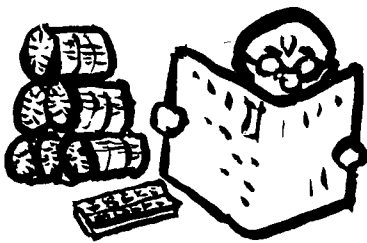
数え十九歳になった三月に、無事学校を卒業致しました。

当時商業学校を卒業した人はあまりおりませんので、就職口も沢山ありました。私は貿易商社を希望したのですが、家の商売を手伝うことになりました。百姓さんから米や麦を買い取って酒造りの醸造元や白米屋さんへ直接売りさばく仲買商で、農家にも肥料を販売してました。私は何もわからぬので、まず各部落の家々の名前を教えてもらって、大百姓か中百姓か、月給とりの片手間の百姓か等、今後の取引についていろいろと教わりました。

なにぶん初めてで、夜は暇でした。大阪の谷町九丁目にある市立高等商業学校が商科大学に昇格する準備として、同校に研究科を設置し、専門の教授が夕刻から二時間、週二回経営学の講義をすることになりましたので、私はそこへ入って二年間通い、学業はそれでひとまず終了いたしました。

米相場みながら

学校卒業後は、家業の米穀肥料商の手伝いに専念致しました。なかなかむつかしい商売で、日々の新聞の相場を見て、今日は玄米の相場は如何程だから、京都や伏見の白米商や酒の醸造家まで運搬して何程の価格で納め



られるか、それを計算して「今日は何ぼ何ぼで仕入れてこい」と父や兄の命令するがままに、お百姓さんの家を一軒一軒訪問して買い求めるのです。都合よく仕入れられる日と、苦勞して一寸も商いのできぬ日があります。また、多量に仕入れができて喜んで帰宅して、夕方新聞を見ると米相場が大下落している時もあり、なかなかむづかしい商売です。相場の都合で利益のある時とない時とがあるわけです。

当時は国道もなく、オートバイもなく、ただただ自転車で、招提村から舗装してない田舎道を通って、伏見から京都まで、戸別に回って行くのです。

現物の見本を持って、自転車で二、三十軒ある得意先を五日か一週間毎に注文取りと集金を兼ねて、順次回りました。米の納入も、貨物自動車がない時分ですから、大変なことです。十二、三俵宛馬力（荷馬車）に積んで、五里からの道を一日がかりで、早朝出発して夕方遅くまでかかりました。当時の道路は、凸凹で大変に道は悪いが、行きがちがう自動車は一台もないのですから、安全は安全ですが時間を要し、なかなか骨の折れる仕事です。

そうこうしているうちに、兄の特別心安い得意先の小原様という方から、「今は精米業が一番有望だから、そちらに電力を引ける土地があれば、駅近くでつもりして（段取りをつけて）下さい。私と共同で経営しましょう」と申し出があり

ました。兄が乗り気になったので、さっそく父は京阪の牧野駅近くで、七十坪程の田んぼを借り受ける約束をし、土地を地上げして宅地をこしらえ、倉庫を建てて機械・設備の準備にとりかかりました。

古い精米機械で

店の方には、小原さんの息子さんと私とが代わるがわるの店番に出ることになりました。また、小原さんの店に長く勤めていた番頭さんが兵隊から帰って、また使ってくれと申し出ておられるというので、その人を住み込みで雇い入れ、その外に地元から学校上がりの少年を一人か二人頼んで、徐々に大きくする計画で出発しました。精米機械は、伏見の酒造家の払い下げ品を安く求めて、電気のもーターは芝浦製の三馬力の新品でした。

長くかかって、いよいよ先方の御息と私とが交代で店に出て目出度く開業……というところまでこぎつけたのですが、先方の子息様が一向に来られないので、不思議に思っていました。合わしたところ、病気のため無理になったということでした。支払った分を等分に分けて仲よくわかれましょう、ということになり、私の方は機械のことがちつともわからないので悪いところは十分修理してからわかれてくれとお願ひして、据えつけてくれた機械屋さんに故障のいきそうなところを入念

に見てもらいました。

機械屋さんはさっそく見に来て、「こんな古い機械は誰がやっても故障なしに運転するのは無理だ」と言うのです。そして「運転できずに困っておられるようでしたら、我等夫婦は子供がなくてどこで暮らすのも一緒だから、私に一切任せてくれないか」ということなので、そうお願いすることになりました。

(続く)



牧野井のぼなご

山中九一郎さん(92歳、牧野阪・丸天酒店)

△その2▽

1990. 8. 1号

独立して頑張る

その後順調にいていましたが、一年半程して当地に大台風雨があって、近くの淀川や支流の穂谷川の堤防が決壊し、家屋は流出したり浸水したり、田畑は水づかりになって米が収穫できなくなり、機械屋さん夫婦に任せていた精米業も経営不振となって、家賃も払えない状態になってしまいました。しかし父親から、自分で頑張りなさいと言いつけられましたので、店を返してもらって、自分で店をやることにしました。朝早くから夕刻まで、二人の店員を使って一所懸命に働きました。現在のようにスーパーや市場のない時代ですから、食事そのほか、女手のない男所帯で、大変苦勞しました。休日是一日と十五日と定め、晴雨にかかわらず、それ以外は絶対休みませんでした。休みの日には、母に洗たくを頼みに行って、食料品をもらって来ました。

当時、精米の賃金は大変に安く、米一俵（四斗入り）搗いて十二銭でした。これだとほんの電気料だけで、収入はただの米糠こめくさと小米こめぐらいで、数でこなさんといきませんでした。仕事が少ない時は申し込みのあるお宅まで出向いて集めて回り、精白



して、また配達して回りました。往復の集配手数料は一俵十銭でしたから、その時代の労働賃金は大変に安いものでした。

自転車で配達

初めは片引き車で集めに回っておりましたが、新聞で、自転車自転車の後につけて荷物を積んで走るリヤカーを名古屋の自転車屋さんが発売していることを知り、さっそく送金して買い求め、若い店員に利用してもらいました。今までは肩で引張って重い米や麦を運んだのですが、今度は荷物を積んで、自分も自転車で乗って走れるのだから、大変に喜んで仕事をしてくれました。

結婚

夢中に仕事をしているうちに七、八年も過ぎ、私も家内を

もらう年齢に達しました。私の母の弟さんの長女でちょうど十九歳になった娘さんがありましたので、二十七歳の二月の節分の日に式を挙げました。二年程して女の子ができました。妻の千代野が里へ帰って産んだ子供だから、千里と名付けました。

私の方は人手も都合よくとのい、おいおいと軌道に乗ってききましたが、兄の方は人手が不足し、店を家内と長年ながねんつとめてくれている店員に任せて、一日はだ目だめ（隔日）に本家の兄の店を手伝いに行きました。一、二年はそうしていました。私の方も二番目の子供が生まれることになり、手伝いに行くのを止めてわが家の仕事に専念しました。

母の死

それから二年程したある日、母が突然風邪を引いて、喉が痛いと言い出しました。当地は無医村で地元地元に医者がなく、翌日、春日かすがという村のお医者さんを頼みました。まだ自動車がないため、人力車に乗って往診に来てもらったところ、喉にできものができて、食事どころか水も喉を通らぬという話です。一寸手当をして下さっただけで、何とも仕方がないというのです。現在なれば遠くても大病院へ救急車で連れて行って手術をしてくれて、一命は助かるところなれども、困ったことです。

万策尽きて親戚一同相談の結果、神仏に御願ひ申すより仕方がないということになり、翌朝長尾駅から汽車で奈良の二月堂へ病氣全快の祈願にお参りいたしました。お参りがすんで急いで帰ってまいりましたが、その時は遅く、最愛の母の死に目に間に合いませんでした。幾重にも惜しい事をいたしました。昭和二年六月十九日、行年五十九歳の若さでした。



発病以来ただの四日での思いがけぬ出来事に、親族一同ただ泣くばかりで、何とも申しようがありません。葬式の時は何年になく特別暑い日で、今も忘れることはできません。一同、泣く泣く葬式を済ませました。

醤油を扱う

古里^{ふるさと}牧野の地も、大阪女子医学専門学校ができ、続いて歯科医学専門学校付近の土地が次々と買収され、府営住宅や京阪電鉄の建売住宅・道路の改良等により牧野駅付近は急に良くなりました。本土各地から集まってくる学生のための下宿屋やアパート、学生食堂やスパー等が急増して、その発展ぶりは目ざましいものです。

その当時、兄の知人である高木という老夫婦がありました。その方は商工会議所の職員をしておられた方で、「牧野がどのように発展してくるようでしたら、良い所があったら軒家を御世話して下さい。そっちへ移転して暮らしたい」と申されるのでした。

商売にまつわるついでに心がけておりましたところ、隣村の宇山という村の、牧野駅から徒歩十分ぐらいの所に下宿屋の建売が見つかりました。老夫婦も、女子医専の女学生を下宿させるのもってこいだと大変気に入り、契約をし登記を済まされました。

その方が申されるには、京都商工会議所の会頭さんは京都酒醤油同業組合の組合長でもあり、その方から、「高木様、あなたが牧野へ転宅されたら、私の方の商品を扱う商店を一軒世話して下さい」と頼まれたのだそうです。しかし牧野に来て日が浅いので、私にそれをすすめるようすめられるのです。私の方も、米屋だけで手一杯につき、よく考えておきましようと返事をしておきました。

ところがその翌日でしたか、私の留守中に、京都のマエダという問屋さんが三輪オートバイで、**萬**(キッコーマン)の醤油十八リットル入り小樽十丁を送ってきました。「私はまだ何とも返事してないし、ひと先ず引き取って下さい。私の方は醤油の樽に穴を開けて呑み口を付ける方法も知らない

し道具もない。準備ができましたから改めて注文しますから」と申してお断りしたのです。ところが、「これだけ住宅が増えたのですからきつと売れます。

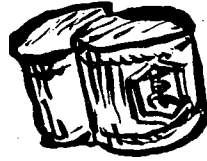
呑み口を付ける道具は帰って会社の方から何とかさせますから、とにかく品物を預って置いて下さい」と申されるから、仕方なしにお預りすることにしました。

それから外交の人が来て、呑み口を取り付ける道具一式は開店祝として寄贈してもらおうから、頑張って売ってくれというお話です。小売の販売価格等を教えてもらい、得意先もなのまま不安ながら販売することにいたしました。

招待旅行付売り出し

販売は未知で御得意先はないけれども、生活必需品だからと、一丁宛お頼みして買ってもらいました。ようやくにして最初の十丁は売れました。代金を支払ったら、また引き続き送ってきてくれました。そのように繰り返しておいたら、米屋さんが醤油屋さんになってきました。

そのうち、清酒一・八リットル入十八本を二函、即ち月に

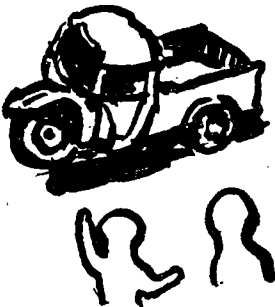


三本宛引き続いてお買い取り願えれば天の橋立へ一泊旅行に招待するという売り出しをしたところ、大好評でしたので、次々と催しを考えて売り出しました。京都の南座、大阪の中座の芝居への招待や北陸の温泉へ一泊旅行に招待とかして売り出しをいたしました。

こうしてだんだんお得意が増えて、私も月に一回はお得意様に付き添って参加せねばならんし、集金にも行かねばならんし、次の売り出しの広告もこしらえて売り込みと現品の配達もせねばならんし、大仕事になってきました。

自動三輪車を買う

そんな時のことです。大阪のある造船会社が仕事替えして、前の機械を利用して自動三輪車を製造販売することになったというので、社長自ら売り込みに来られました。外国品に決して劣らぬ製品ができた、貴殿が最初の取引先ゆえ十分勉強しておくからは非一台買求めて下さい、と申されるから、私は信用して一台買求めました。それが、二五〇ccの、一番馬力の少ない車でした。私の店では、米でも醤油でも扱う品は皆



重量品ばかりで無理があり、初めから故障ばかりで使い物になりませんので、三〇〇ccの馬力の大きい方に取り替えてもらいましたが、それでもまだ使い物になりませんでした。

その当時小型車を運転しているのは、氷室村のお医者さんか枚方のお医者さんぐらいで、皆舶来品^{はくわいひん}で、人以外に荷物を積んで走るのは当地では私以外誰もいません。車の販売店も修理屋もありませんし、車の車体検査もありませんし、運転免許証も要りませんでした。

それから三年程して車検があるようになり、車を所有している者は何月何日何時に枚方菊人形前へ車を持って出頭せよ、ということ、言われる通り私は出頭いたしました。その当時車はまだ七、八台しかありませんでした。

車が必需品に

私が最初買い求めた車は、修理も直接製造元へ行かねばなりません。一寸走ると故障し、故障すると無事に帰って来られません。さっそく会社へ電話をかけて頼むと、今日には行かんから明朝早々にお伺いする、と言つて、来てくれたのがもう十一時頃になります。各部分を点検して故障の部品を大阪の築港の本社まで取りに帰り、また部品を持って来て修理が終わったらもう夕方です。電車賃から部品代、修理の日当等支払えば大変な失費になります。これではかなわぬと、一

年もせぬうちに、名の通った車と交換しました。

ある日父が私宅に遊びに来て一泊し、機械の回転している工場を一巡して、私が前日シートをかぶせて隠しておいた車を見つけてきました。これは何かと尋ねられ、私も返答に困り、これは自動三輪車と言つてお米の四斗俵を四、五俵積んで運搬できる商売道具と申しますと、そんな高い道具はまだ必要ないやろうと申されました。私が働いて買ったんやからまあ辛抱して下さい、と了解してもらいました。

その後車検は毎年あるようになりました。牧野村が枚方市に合併になってからは、修理店や小型車の取扱店ができ、大変便利になってきました。私も、改良された車を次々と買い入れて商売用にご利用しました。やがて運転免許証が要るようになりましたが、私は永らく乗用しているので、試験なしで下附してくれました。

(続く)

牧野井のぼる

山中九一郎さん（92歳、牧野阪・丸天酒店）

△その3▽

1990. 9. 1号

現金で安く買う

商売の方は順調に発展しておりましたが、戦争が始まってからは統制がしだいに厳しくなり、配給制になると、実績のない業者は転廃業を余儀なくされました。当地も、十八軒あった業者が三軒に整理されました。私も、人手が足りぬこともあり、米屋の方を思い切って縮小することにしました。

酒類を毎日扱っていると、また新しい事を耳にするものです。現金融通問屋という卸屋があつて、現金で品物を仕入れて現金で品物を売りさばくというのです。小切手は通らず、景品は一切抜きです。そういう卸屋が大阪の福島二丁目にできたと聞き、さっそく現金を持参して白鶴はくつや菊正宗等の有名品を買い求めて帰り、香里や枚方の同業者に販売して帰りました。同業者も安く仕入れられるので大変喜んでくれました。現金で仕入れた品物を愛車に積んで、まだ舗装のできていな

い悪い道でしたが行き違う車も少ないので、淀川堤を安心して走れました。

長男の病氣

商売が忙しかったせい、子供がよく大病をしました。長男朝善が五歳の時でした。風邪を引かせて枚方から前地先生に往診してもらったら、この風邪はたちが悪いからすぐに大阪の大病院へ入院さすか、または派遣看護婦さんを住み込みで頼んで十分な手当をするかしないと大変なことになる、何とかしなさい、と申されるのです。まだ市民病院もない頃です。仕方なく看護婦さんを二週間、宿泊付きで来てもらって、苦勞して全快させたことは、今だ忘れることはできません。

もう一回は四條畷中学校二年の時でした。連日期末試験で後一日という時になり、激しい腹痛が起りました。試験中に休んだら成績に関係して困る、と本人が申しますので、貨物用の三輪車の荷台に寝かせ、学校まで運びました。私は試験中は外で待って、無事に連れて帰りました。帰って医師の診察を受けましたところ、盲腸とのこと。びっくりしてすぐ手術を受けました。

台風で骨折

また一つ重大な事を思い出しました。長男朝善が小学校一

年生の時の事です。

一年生の一学期までは招提村の小学校の校区になっていたのでそちらへ通っていたのですが、牧野小学校（現在の殿一小学校）が山手に新校舎を建設したので校区が変更になり、二学期の九月一日から勇んで牧野小学校に登校いたしました。ところが、その日、近畿一帯を襲った室戸台風で甚大な被害が出たのです。

私方では、もはや学校へ到着している時間ゆえ、先生が歩いておられるから大丈夫と思っておったところ、十時頃になって、小学校の校舎が風で吹き飛んで先生も生徒も死んだり怪我をしたり大勢していると聞き、さっそく自転車で飛んで行ったんですが、まだ風が強くて自転車なんか乗れません。かっいで歩いて行きました。

行ってみると、校舎が風で飛んで運動場も歩けません。知った人がおられて、「お宅の息子さんは今さっきお宅まで送り届けたから、一刻も早く帰ってあげなさい」と言われましたが、私宅にはもう一人女の子がいるのです。壊れた校舎のぐるりを探し回りましたが、見つからな



いので東の方のいも畑の方を見ると、女の子が泣いているのが見えました。その中に、朝善の二級上の姉がいました。幸いに無傷でしたので、先生にその由申し伝えて家に連れて帰りました。

先生は、古い校舎は危険だから新しい校舎なら大丈夫と思って、一年生を先に新校舎に移動させ、それで安全だと思っただけです。ところが先生二人と生徒十五人が死亡するとは、まったく意外だったという話です。長男は、怪我の内が一番重い、足の大腿骨だいたいこちの骨折でした。

停電で手術できず

私は、枚方の西口の前地先生宅へ往診を依頼しに参りました。その時は、電柱も道を横切つて倒れているため、自転車をかっいで越え、まだ風がひどくて自転車で乗れませんから歩いて押して行きました。それでも往診を頼みに行ったのは私が一番先でした。都合よく先生は往診に来て下さったのですが、足の骨が一番太いところで折れているから、「私の友達か日本橋で外科を開業しているからそこへ紹介します」と言つて、「自分の乗ってきた車で送つてあげる。今日は電車も通つていないから」と、親切に申して下さいました。私ら夫婦は、お言葉に甘えて送つていただきました。

ところが行ってみると、大阪も台風の被害がひどく、電気、

瓦斯も通ぜず、後三日程そのままの状態で待ってもらわないかと申され、応接室の大きい椅子を外に出して寝かせてくれました。「前地先生の紹介で来たんだから十分の手当がしてあげたいが、停電では何とも致し方がないから辛抱して下さい」との事。三日間は何もせずに見殺しでした。やっと停電も解除されて手術をしてもらいました。

毎日七条へ通う

二、三日停電のため置き去りにされたため、傷口は固まってしまって手術は一寸手間取りましたが、まあ都合よくいきました。先生の申されるには、一ヶ月程そのままギブスをして入院していなさいとの事で入院しました。

その後も何もせずに放って置くのと足の関節が曲らぬようになると聞きましたので、今度は、京都七条の接骨医のところへ行って、ギブスの石こうで固めたところをノコギリでポツ切り取って通風をよくして、毎日足を温めて関節の運動をしました。

私は毎日休まず、息子を車に乗せて六ヶ月以上も、日曜・祭日以外は毎日七条の接骨院へ通いました。そして自宅では毎日欠かさずお風呂をわかして息子を風呂に入れ、一・二・三……と号令をかけて何回か数をよんで関節の運動を続けました。毎日風呂をわかすと言うても、現在のように瓦斯がな

い時代で、薪割木ですから苦勞しました。苦勞したおかげで、十ヶ月目ぐらいで完全に歩行できるようになり、やっと安心しました。

堤防からずり落ちる

車の失敗談を書いておきます。京阪国道がまだできてない時代です。国道は舗装してなく、荷物はいちいち牛車に積んで歩いて行った時代ですが、あわて者の私は、三輪車で京都伏見へ通ったものです。

ある日私は、伏見へ行くため旧国道を走って、淀から中書島へ通ずる競馬場の南側、淀川の堤防伝いに車を走らせていました。前日の雪どけで道路が至極悪く、中央に大きい水たまりがあって両端はとけた雪でこねこねでした。中央と両端が悪いため、どちらか一輪がひっかかります。仕方なく後の一輪を左端にかかるようにして徐行したところ、車もろともズルズルと滑り落ちて行きました。

ブレーキも用をなしません。運を天に任して車の中で呆然としておりましたが、幸いに堤防ののり先があって、自然と停止いたしました。一メートル先には大きなたまりがあって、よほど命冥加があったのか、無事に助かりました。もう一寸で、冷たい雪どけ水の中で死ぬ運命でしたが、不思議に車も無疵で助かりました。



車から降りて四方を呆然と見渡しておりますと、堤防工事の工夫の小屋が見つかりました。さっそくその飯場へ駆け付けて朝鮮人の人夫に現場を手で教え、頭をペコペコ下げて、車が下へ落ちて困っているから上へ押し上げて下さいと頼みました。皆の方はよく了解し、押し上げて下さいました。車は荷物を取りに行きがけで空だったので、四、五人で楽々と上の道路に上がり、無事に家に帰ることができました。

四つの時代を生きて

さて、子供の事、家の事、店の商の事等いろいろあります。が、長くなりますので省かせていただきます。

私は年とって会社（商売）をやめても、まだまだ家のため社会のためにできるだけの事はしたいと思い、一寸早い目の八十五歳の元気のよい間に退職させてもらいました。その後三年程は元気でしたが、八十八歳か八十九歳になった時から不幸にも右の足が悪くなり、歩行が少し困難になりました。

それまでは、柳谷観世音への参拝旅行のお世話もさしてもらっていたのですが、旅行の案内役もできぬようになり、大変

残念な事です。毎日氏神さん（片埜神社）へお参りして歩行練習を続けましたが、なかなか全治せず、だんだん重くなって困っております。その時分から耳も聞きづらくなり、電話の話も不十分で、困ったものです。幸いにも、長男夫婦や孫夫婦が面倒を見てくれて、何不自由なく暮らして行けることに大変感謝しております。家内も病弱であちこち悪くて病院通いが多いのですが、家内の妹の千鶴子さんが買物その他、何かと助けてくれて、有難い事です。

私は、足が不自由で思うように活動できぬようになったので、私の一生を一枚一枚書き続けております。齡九十一歳の七月中頃、暑い最中です。（その頃手記を書かれた。）

私は体格は中ぐらいでしたが、健康で、学校を卒業して商売を始めてからでも六十年以上大した病氣一つせず、大した失敗もせず、明治・大正・昭和・平成と生き長らえて、大変に幸運な事でした。その間、日清・日露、二回の世界大戦と、不幸な戦が続きましたが、そのような大難関も無事に切り抜ける事が出来ました。心より感謝いたしております。

（了）